

「ドイツ近代哲学研究会」

第2回研究集会開催のお知らせ

ドイツ近代哲学研究会は、18世紀前後の広義 of ドイツ古典哲学と、それ以降の19世紀ドイツ哲学を研究テーマとする研究会です。私たちは、シンポジウムやワークショップの開催を通じて、ドイツ近代哲学を研究する人々が交流する場を提供するとともに、個別哲学者研究の枠を超えた対話を促進することで、ドイツ哲学研究全体の興隆を目指しています。そのため、本研究会では、カントやフィヒテ、シェリング、ヘーゲルといったドイツ古典哲学の巨人たちだけでなく、ショーペンハウアーやニーチェ、新カント派といった19世紀以降の思想家にも焦点を当て、幅広いテーマを扱います。

来る2026年3月15日（日）に、第2回の研究集会を開催いたします。

日時：2026年3月15日（日）

場所：京都大学吉田キャンパス 文学部校舎1階 第一・第二講義室

【プログラム】

- | | |
|-------------|--|
| 09:00-9:40 | 橋本悠介（京都大学）
『永遠平和のために』を歴史哲学的視座から解釈するフリードリヒ・シュレーゲル |
| 09:40-10:20 | 安保広睦（北海道大学）
「絶対の媒介的中項」としての直観的悟性について |
| 10:20-40 | 休憩・交流 |
| 10:40-11:20 | 葛西李成（大阪大学）
カント『判断力批判』における美的経験と天才 |
| 11:20-12:00 | 松井隆幸（名城大学）
ヘーゲル『大論理学』概念論における「概念の実在化」とはどのようなことか？
—とくにその「主観性」から「客観性」への移行にかんして— |
| 12:00-13:20 | 昼休憩 |
| 13:20-14:00 | 客本敦成（大阪大学）
世界の外部と内部に同時にいること——『精神現象学』「自然の観察」
における対象の内化の困難について |
| 14:00-14:40 | 青木崇（学習院大学・上智大学非常勤講師）
あるドイツロマン派ユダヤ女性の「教養」 |
| 14:40-15:30 | ネットワーキング |

【シンポジウム】 15:30-18:00

「ドイツ近代と Bildung 論の展開」

本シンポジウムでは、18世紀から20世紀初頭にかけてのドイツ語圏思想における Bildung（教養・陶冶・人間形成）概念の多様な展開を、思想的観点から検討します。Bildung という語は、ヴォルフ学派や啓蒙主義的教育思想において初めて体系的に用いられ、ニーチェによる教養批判を経て、20世紀の文化哲学へと受け継がれてきました。その展開の過程において、Bildung は、個人の倫理的・知的形成、国家と教育制度、芸術や宗教における内面性の構築、さらには文化的表象や象徴形式の問題など、多様な領域で中心的な役割を果たしてきました。本シンポジウムでは、とりわけヘルダー、フンボルト、ニーチェという三人の哲学者に焦点をあて、彼らの思想において Bildung 概念がどのような意味と機能を担ってきたのかを検討し、ドイツ近代思想におけるその意義を改めて考察します。

提題

寺川直樹（大谷大学）

「ヘルダーのビルドゥング思想—その人間観・自然観・宗教観に定位して—」

柳田和哉（大阪大学）

「初期フンボルトの陶冶理論—陶冶と政治の連関に着目して—」

竹内綱史（龍谷大学）

「ニーチェの Bildung 論」

司会

八木 緑（関西学院大学）

「ドイツ近代哲学研究会」の詳細に関しては、HPをご参照ください

<https://sites.google.com/view/german-philosophy-jpn/>